



商買は草の種本。書けども盡きぬ、濱の眞砂の洒落次第、蹉跎次第の放題。金の生る木を彫つて、小刀細工の錢攏は、作者の得手に嗜欲、趣向は書肆の金筥に、山吹色の黄表紙と一寸祝つて筆を執る。

壬戌孟陽

十遍舍一九

古周賣ハ草の種本書にもあめはあり
 生石のまじりて。石の底より生れぬ。
 余の生る本と彫く。小刀細工の浅掘り。
 作者乃り。山吹色乃り。黄表紙。一寸程の金
 針を執りて

壬孟陽

十通舎一九〇

御存じの草紙の版元榮昌堂の

主、年々の雙紙

皆變りたる趣向もなし。

今年が一番當てる

つもりにて、いろく

と工夫をなし、

まづ、雙紙の作者、例のなま

け者の十遍舎一九を呼び寄せ、

何がなしに酒を出し、

その酒の中へ

作のよく出来る妙薬を入れて

飲ませける。

その薬といふは、

干鰯、馬糞、

鋤、餌、これを皆細末になし、



「只今のお薬
てござり
ます。」

「おめへ、

去年潮來で

女郎を買つて、

流連をした時、

金がなくて揚代の

代りに狂歌を詠

んだといふ話を、

錦子の八重姉さん

がこつちの店で

話がありや

したよ。」

百姓の身の脂を^{あぶら}しぼりて
 錬^{れん}合せ、丸^{まる}薬となし、
 一九に飲ませけるに、
 不思議や、妙薬の徳にて、
 今年の作は途方もなく
 よく出来ける。



一九が作よく出来ければ、
 繪をかゝせて版木屋へ誂へ、
 村田屋何でも早く
 仕込んでおいて、思入れ
 賣るつもりなれば、
 早急にせねばならず、
 版木屋にするけられては
 なるまいと、豫て蓄へ置い
 たる
 寶永年中、富士の山の
 湧き出でたるときの
 近江の湖の
 水を酒の中へ入れて
 版木屋へ持参し飲ませければ、
 これも妙薬忽ちしるし
 ありて、一夜のうちに



あなたが
 下さった
 酒は、
 不機ながら水が混つて居り
 ました
 から、さつ
 ぱり酔ひ
 ませぬ。

彫^はれたりければ、版元大きに
喜び、

薬も利^きけばきくものだ。

これから又どうぞ

版刷^{はんしゅ}手合^{てあひ}に

精を出させる

妙薬を

調へませう。

朱肉
色々
青肉



「夏の内仕込

んておかねば、思

ふやうに商ひが出

來ませぬ。それ

を今夜中に上げて貰つて、そ

の後に喜久丸の大錦^{にしき}が六七

番彫^{あど}つて貰ひてえ。」



何でも思入れ仕込んで置

くつもりにて、版行^{はんかう}を

する手合^{てあひ}に、朝比奈

の腕と景清の腕とを

黒焼にして、これも

酒の中へ入れて飲ま

せければ、版刷^{はんすり}手合^{てあひ}の腕^{うで}が

途方もなく力が強く

達者になり、

一日に一人で

何萬枚といふ數を刷りける。

偏^{ひとへ}に朝比奈が草摺^{くさずり}を

引切りし腕の力と、



「徳利^{とくり}のうちからおいらが
かうして出て居ねえと
繪面^{えづら}が悪いから、
そこで二人がいゝ役
よ。せめて腰掛
でもあればいゝ。」

「コウ早く上げたら、
晩にはひやかしに行
くべい。ゑて吉が待
つて居るだらう。」

景清が鍛^{しころ}を引切りし
力にあやかりしと見
えたりける。



飲むが
いゝよ。」

「それよりかア
菱屋^{ひしや}へ行
つて、すつ
ぽん煮で

「おらア、先^{せんと}度
柳屋の傘を置
いて来たから取りに
行かざア
なるめえ。」

雙紙を順に一枚づゝ揃へる
 を、丁合をとるといひてか
 くの如くするなり。これも
 早く嵩のとれるやうにと、
 豫て工夫をして置いたる
 事なれば、
 道中小夜の中山の
 やから鉦を黒焼にして、
 丁合をとる者に
 飲ませければ、
 妙薬のしるし、
 やから鉦を打つ如くに



「雁々三つ口、
 丁合とら
 しよ、は
 どうだ。」

その手の早さ、
 ちゃん／＼と
 直様^{ちきさま}丁合を
 とつてしまふ。



雙紙の丁合をとつてしまふと、
 それから後前天地を截ち揃へる。
 これがまた截ちにくいものにて
 暇の入るものなれば、
 これを截つ者には祇園豆腐の庖丁
 を煎じて飲ませければ、
 忽ちこの男手が早く、
 截板も定規も
 いらず、豆腐
 を切る如く、
 とんくくと
 とんくんと
 きつたり
 ける。



扱これから雙紙の表紙をか
けねばならず、これは皆

子供のする事故はかどらず、
宿六もこれには困り、

何ぞよい妙薬があり

さうなもんだと色々工夫

してみる。

変帳

生帳

「はて
よい
思案
が
あり
さ
うな
もんだ」



「兎角雙紙の半
丁にはかうい
ふ所が是非あ
るものだ。」

「表紙掛といふ奴が
全體節を使ふ
奴だから
むづかしい。」



表紙掛には妙薬もなく、
ふと思ひつきて、太鼓を
叩きたてゝ嘯しけるは、
かけるわゝ

表紙をかけるわ
拍子にかゝつてかけ

やんしよ、

かけるは鉤裂、頭は斜がけ、

逃げるは追かけ、鍋金鑄

掛、圍ひはお手かけ、

喉アは焼かけ、

旦那は矢鱈に

通ひかけ、

そりやゝかけるわ、

「そりやこそかけるわ、表紙
をかけるわ、
どこすこどんく。」

「おいらもどうか踊
りたくなつた」と
この小僧とんだ
ことをいふ。

表紙をかけるわ、

拍子にかゝつて

かけやんしょ、

どこくくくどこ

すことんと

囃し立つれば、

子供は皆々うかれ出し、

この表紙掛は面白いと、

夢中になつて飯を食ふ事も

打忘れ、

夜も何時までも眠る事なく

精を出して表紙を

かける。

ちゃんちきくすつちゃんく。

「表紙掛
は面
白い。」

「今朝
おまんま

を食べた儘だ
が、ねつから

腹が
減ら
ぬ。」

屋問本地中の

扱又雙紙を綴^よぢるは女の仕事、これ
も埒があくまいと、いろ／＼と工
夫するに、昔唐土^{もろこし}より渡りしセツ
に曲りし玉に糸を通すに、蟻に

糸をつけて穴の口元に

入れ、此方^{こなた}の

口へ蜜を塗り

おきたるを、

かの蟻、蜜の匂を嗅

ぎつけ、だん／＼と

玉の内をこなたの口へ脱^ぬけ

出でたり。これを蟻通^{よほ}しといふ。

「蟻通しの案じは

ちと理に落ち

たやうだ。」

「へい、は
むじか
し。」



この如くにしたらばよからんと、
蟻を捉へて糸をつけ、草紙の穴を

通すつもりのところ、

どうもさう甘くは行かず

これは止めにしで、

口も八丁手も八丁といふ女

ばゝかゝに綴ちさせ

ける故、先づこれも間に

合ひける様子なり。



「こゝは何
も書く事が
ないだ。」

「とんだ
この本
は面白
いよ。」

雙紙賣出しの日は、糶の手合に

韋太天様の守を持たせて出しけるに、

作が殊の外よく出来ける故、

賣れる程に、背つて出ると

賣つて仕舞ひ日には幾度となく

歸つては背負ひ出し、

韋太天の守のおかげにて江戸中を

馳け歩きけるに、

先々の本屋にても

買ふと直に賣れてしまふ故

糶の手合の後を追つて歩き、

こつちへ来て下せえと



「たつた今置いて行かしつた傍から、
もう直に賣れて仕舞つたから、何て
もありたけ買ひませう、こつちへ來
て下され。」

「これは無體な、
先づ此處を放し
て呉んなせえ、
今に參り
ます。」

やうく引ずつて來ると、

あとから、いや先づこつち

の方へ來て下せえと

しきりに引張る。

あつちこつちと

一日引張^{ひっぱりだて}枰^{だて}に困り果てる位にて、

仕込^{しこみ}どんと仕込んである故、

足^{あし}限り根^{こん}限りに

江戸中へ

卸^{おろ}して廻る。

「いゝ魁^{たは}がかう

引張^{まんざら}つたら萬更^{まんざら}

でもあるめえが、

親爺^{おやぢ}だと思つて

さうつれ

なくせ

ぬものだ。」



村田の雙紙大評判にて店先には
 人の山をなし、流石澤山に
 仕込んだる草紙、みな賣切れて
 しまひ、買手をも待たして
 置いて綴ぢるやら仕立てるやら
 大騒ぎ、買手もせきこんで
 来て、さつきから待つて
 居るに早く下せえ、
 いやまだ綴ぢませぬといふに、
 綴ぢるはこつちで綴ぢようから
 その儘で下され
 と持つて行けば、



こちらへはどうして下さる、
 イヤ今刷^すつて居りますといふに、
 いや／＼刷らずとようござる、
 その儘で下せえと、
 大きに儲^{もう}りけるぞ
 潔^{いさぎよ}し。



くさ雙紙の賣出しには蕎麥^{そば}を

買つて祝ふ事、

何れの版元にても極りたる

吉例なり。一九、賣出し

に村田屋へ呼ばれて蕎麥

の馳走に預る。

至つての好物、

いくらでも食次第^{くしだい}、

今年から身代もこの蕎麥の

通りに延びる瑞相^{みずさう}

まづは目出度く市が榮えた。

